

長岡市山古志での都市農村交流に関する報告と考察 — 2008年4月から2010年10月までの主な事例から —

プロジェクト2 客員研究員
一級建築士
仁瓶 俊介

(構成)

1. はじめに
2. 主な都市農村交流の事例
3. 都市農村交流に関して
4. (仮称) やまこし復興交流館構想
5. 民俗学者 宮本常一の提案
6. おわりに

1. はじめに

本稿は、新潟県長岡市山古志で2008年4月から2010年10月までに行われた、「都市農村交流」の主な事例、進行中の「(仮称) やまこし復興交流館構想」そして約30年前ここで講演された「民俗学者 宮本常一の提案」の報告です。これらの報告とその考察の結果、この交流上の諸活動は「地域づくり」の展開に強い影響を与えていることが明らかになりました。

以上が摘要相当の部分ですが、本稿をまとめるにあたっての研究目的、研究方法等などの概要は以下のとおりです。

(研究目的)：いわゆる農村振興に関して、農業生産以外の事業として観光交流事業がとりあげられて各種実践されていますが、この広範囲におよぶ事業のなかで「都市農村交流事業：都市住民と農村住民との交流事業」が、産業振興と地域づくり活動へおよぼす効果について、山古志地域での場合を通して探っていくこ

とを目的としています。関係する事例全体の調査には到りませんが、代表的な事例と情報の提供が得られたものを対象事例としました。

(研究方法等)：調査対象事例の事業又は行事の実施事務局からの聞き取り取材を原則としました。それが出来なかったものについては、新聞等の報道記事によりました。取材方法は面接による聞き取り、電話による聞き取りです。文献研究では関連研究の概要、概念・用語の把握を、関係図書館及びサイニー検索等によって行いました。また山古志での研究合宿等では進行している現地の復興状況等の視察を行いその時点での新しい情報の収集を行いました。また2008年度の農家民宿での宿泊体験、2009年度の農家等民泊での農村生活体験の取材、2010年度では現地で行われた各種行事への参加体験などを通して観察・見聞したことの記録メモを整理・記述する方法を進めました。

(概念・用語等の把握について)：2009年度の研究概要では「ツーリズム」の概念把握が進行しなかったため、その関連事項に関する報告が出来なかった経緯がありました。その後、2010年2月に新潟市内で開催され、復旧・復興の過程が大きくアピールされた「中越じまん市」と関連団体による支援事業の取材により交流事業の全体像がかなり判明しましたので、交流の分野からの報告に見通しが立ちました。さらに地元のNPO団体の主催による交流行事も継続して行われていましたのでこれらについての取材。加えて2010年3月、(社)中越防災安全推進機構から「中越大震災メモリアル拠点整備基

本構想」が発表になりました。これによってメモリアル拠点の施設的な整備が具体的に進められることとなり、山古志地域においては「やまこし復興交流館(仮称)」が古民家を移築・復元する手法で、また施設の内容としては「地域住民と来訪者の交流の拠点」と構想・計画され、復旧・復興の最終段階に入ったことを予感させる構想の公開がありましたので、交流というキーワードの把握を並行して進めた内容の報告としています。なお山古志は周囲の自然環境等から典型的な山村と考えられますが、農山漁村を代表している「農村」という表示を使用しました。

2. 主な都市農村交流の概要

2-1 教育体験旅行, 農家民宿等

(1) 教育体験旅行(農村民泊)

2008年度からは新しい試みとして教育体験旅行受入事業が始まりました。この「教育体験旅行」には、修学旅行、林間学校、セカンドスクールなどが含まれ、実施時期はおもに夏で一部春と秋に行われました。日帰り以外の滞在・宿泊型においては2泊3日が一番多く、ついで1泊2日です。教育体験旅行の対象者は、中学生と高校生が主ですが小学生の場合もありました。いわゆる来訪者の団体が、農村の農家等の民家に宿泊するという農村民泊スタイルで実行されました。この概要は、「ながおかグリーン・ツーリズム推進協議会事務局」、「長岡市山古志支所産業課農林係」、及び「山の暮らし再生機構(LIMO)」からの聞き取り及び資料によりました。2010年度で3回目の受入れとなりますが、この事業の3年間をおおまかにふりかえってみます。宿泊者の規模は、

- ・2008年度(H20年度), 宿泊者:約200(人・泊),
受入農家数:約31軒, 日帰者:約190(人)
- ・2009年度(H21年度), 宿泊者:約300(人・泊),

受入農家数:約54軒, 日帰者:約150(人)

- ・2010年度(H22年度), 宿泊者:約210(人・泊),
受入農家数:約38軒, 日帰者:約0(人)

上記の(人・泊)は、1人が1泊した場合1(人・泊)としていますので、1泊の団体と2泊の団体の人数と宿泊数が合算されて表示されます。人数だけでは把握しきれない規模を示すものとして使用しました。以上から山古志地域での教育体験旅行受入事業の規模と推移が把握できると思いますが、筆者の理解・把握では、大規模ではないし増加もしていない傾向だと思われました。2010年度の「日帰者が無し」というのは地域の紹介という点からは残念な結果です。

さて見学・体験のおもなメニュー(種類)としては、被災現場見学、共同牛舎見学、農村生活体験、野菜収穫体験、農産物直売所作業体験、手鞠づくり、棚田環境保全作業などがありました。特に山古志の特色を示す体験としては「養鯉業体験:錦鯉の選別作業、錦鯉エサやり等」、「闘牛ふれあい体験」、「神楽南蛮(唐辛子)、巾着ナスの収穫体験」、「中山隧道散策」、「観光闘牛」、「被災の体験談」などがありました。

見学・体験メニューからみた特徴はやはり地域の資源、地元特産に関連した、錦鯉、闘牛(牛の角つき)、神楽南蛮(唐辛子)などにつながるものが多いと思いました。2009年度の取材で、「棚田環境保全学習プログラム」を行った栃尾地域半蔵金地区でお聞きした「農業を理解してもらいたい」という気持と熱意とは、いかえれば「農業生産と農村生活」の現状発信という点ではないかと考えます。すなわち農山漁村では「生産場所と生活場所」が直近で分散していない場合が多いという点です。生産と生活が混然一体としてあることが農村生活体験・野菜(栽培)収穫体験等から伝わるのではないかと考えられました。都市部では生活場所と就業・生産場所が離れている場合が多いので、この「生産の場と生活の場が直近していること」が農村

体験の大きなテーマであり、その体感が来訪者の大きな発見ではないかと考えます。

この体感を通して、来訪者は言葉の説明からでは得がたい「農業の理解」を深めると考えられます。農産品と共にその生産過程の発信・広報が必要になった社会的背景があると考えられますが、生産プロセス概要のアピール・提示によって安全とか価値とかを伝えることも交流の重要な要素であることを理解しました。同じく2009年度の取材中、「野菜のナス収穫体験」を行った山古志地域竹沢地区でお聞きした「中学生からの『ナスにはどうして棘があるのですか?』との質問に対して、答えに窮した」という点に関することです。これはひとつの事例ですが、受入者には予想もしない来訪者の質問・疑問が、「なぜそんな質問するのか?」という新発見であり、生活習慣の再発見だったり、受入地域の特色・特徴の再発見につながり、そこからさらに、来訪者への体験素材の選択につながるのではないかと考えられます。その相互のやりとりから、農村生活の魅力・苦勞の部分が伝わると考えられます。この「ナスの棘」から、収穫直後には棘があるけれど、保管・運搬・販売での時間経過のなかでなくなってしまうことが伝われば、新鮮なものとならないものの相違も実物から伝わると考えます。

以上はおもに取材結果からの記述ですが、2010年11月になり山古志支所産業課経由で、ながおかグリーン・ツーリズム推進協議会事務局から本年及び昨年に実施された、「受入れ農家へのアンケート結果」を見せてもらう機会がありました。ここから筆者が把握したおおまかな諸点は下記のとおりですが、それは『①受入れ農家は、その回数が多い世帯が過半で、家族数も少人数世帯が過半であった。②来訪者はほとんどが好感していた模様の回答で、自然を知ってもらった、喜んでもらった、また来ると言っていた、がほとんどであった。③家族の負担がおおきかったという回答は極めてすくなかった。④今後に関しては、ほとんどが受入れ

たいというものであった。』というものです。筆者はこの事業が継続されることを期待していますが、今後は来訪した生徒さん達のアンケート結果を見せてもらい、受入れ・来訪のそれぞれの感想を比較したいと考えたところです。またこの「教育体験旅行受入事業」をグッと抽象すれば、「遠い親類への訪問」、「遠くの有縁者への訪問」とも考えられますので、来訪者本人の交流から、地元に戻った後の体験談などによって両親、縁者などを含めた交流に繋がることも期待しています。

(2) 農家民宿（農林漁業体験民宿）など

ながおかグリーン・ツーリズム推進協議会：2009年（平成21年）4月発行のパンフレットなどによれば、山古志地域内の農家民宿（農林漁業体験民宿）は4軒ほどですが、そのほかの宿泊施設は3軒ほど、学生向け宿泊研修施設が1軒ほどあります。農家民宿では地震前の利用者は、錦鯉関係者、山菜・きのこ愛好者、写真愛好者などであったものが、地震後には地滑り対策工事関係者、スポーツ合宿者、前述の教育体験旅行者に範囲が広がったとのことでした。概ね奥さんが農家民宿の経営を分担し、ご主人は他の業を行うという多角的な経営が多いのですが、例えばご主人が農業（水田稲作）と養鯉業を行っている場合、宿泊と共に農業見学・体験あるいは養鯉業見学、養鯉業行事の見学などもセットで計画できると思いました。この農家民宿等に関して、地域全体での宿泊者数などの把握は無理でしたが、地震前後のおおまかな傾向としては「横ばいか若干増」というお話でした。もうすこし詳細な報告ができれば良いのですが取材上の限度も感じましたので、詳細な取材をあきらめたことも事実です。筆者は2008年度に宿泊体験を実施し、2009年度も引き続き宿泊体験をおこなってきましたが、「宿泊」そのものの体験に絞りすぎた面がありました。農家民宿側とじっくり協議して、その時点での見どころ、農産物、体験行事、料理の種類などを相談して翌日のツアーを組み

立てる必要があったと反省しています。その反省点からいえることは、小人数でツアー目的をある程度決めたら、その詳細を民宿側と相談することが必要と痛感しました。これは来訪者側の概略希望を伝えたいので、要相談部分になるとおもいますが、農家民宿側では、その時点での各種事情を調整して相談にのってくれると現在では確実に言えます。地域内行事、民宿側都合、天候などに対するの予め行っておく準備が、そのツアーの充実度に強く影響すると考えられました。錦鯉の観察ツアーを考えた場合、春・秋の錦鯉品評会、春の野池移し（越冬用の生簀からの放鯉）、鯉稚魚の選別、秋の池上げ、生簀での越冬準備など、節目・節目がありますので、各関係作業のピークを外した日程を目標とした計画・予定づくりが必要となり、地域内での春夏秋冬の行事日程をチェックする必要があると思いました。この行事日程は、各種のURLと共に山古志会館内にある総合案内所「茶坊主」（地域復興支援センター山古志サテライトの運営）で確認できるそうです。

(3) 農家レストラン

2008年12月にオープンした、虫亀集落にある「農家レストラン」は、地元産食材を調理して提供するということが筆者も注目していましたが、開店早々早速訪問して体験してみました。開店当時のチラシを中心に記述を進めます。「虫亀産の食材を主に利用した、安全で美味しい『かあちゃんの味』を提供します。」とあります。「おしながき」では、多菜田定食(煮物コース)、同定食(天婦羅コース)、けやき定食、そば各種、うどん各種、おにぎりセット、飲物、お酒各種、とあります。「けやき定食」の主菜は、肉じゃがだったような記憶ですが、和風の味付けで量もたっぷりあり若者向けで美味しい定食でした。漸く山古志地域にも農家レストランが誕生し、地産地消の広報も始まったと思いました。建物の大きさまでは把握出来ませんでしたが木造2階建てで、間取り的には前面道路側には食堂玄関と農産物

直売所、その奥が和室の食事室、さらにその奥が厨房等となっていました。虫亀産等の地域内の地元食材を提供することと、来訪者が宴会を除いて予約なしで利用できることが特徴になっていると思いました。中越防災安全推進機構(2010年1月11日)発行の「防災ジャーナル：第19号」の記事では、2009年12月16日でオープンから満1年を迎えたこの農家レストランを特集していました。お母さんたち4人で営業、メンバーのひとり「この1年、夢中でやってきた。お客さんが残さずきれいに食べてくれると、うれしくてね」と振り返ったそうです。新緑や紅葉の季節は週末になると人でにぎわい、同年11月初旬の日曜には70人以上が来店したそうです。「外から来る人にも地元のひとにも愛される憩いの場を目指している。」とありました。またこの農家レストランでも販売している「新名物：山古志弁当」の記事も同誌にありましたので、以下引用しますと「山古志地域にある民宿や食堂6店舗がそれぞれ異なるメニューで作り、パッケージを統一して千円で販売している。共通するのは『地域に受け継がれてきたごちそうを堪能してほしい』との願いだ。」とあります。2009年春から会議を重ね、同年10月から一斉発売になったそうですが、この発売以降の約2ヶ月の売り上げは約1,200食だったそうです。予約制の販売だそうですが、1店舗・1ヶ月当たり100食はかなり多い販売だったと思います。食材的には山古志牛、真鯉(まごい)、サトイモ、手づくりコンニャク、ゼンマイ、ウド、カグラナンバンなどが使用されるほか、季節ごと、お客さんの年代ごとに工夫されるそうです。この「山古志弁当」には専用のチラシがあり取扱い店舗の詳細が示されていますが農家レストラン以外のところでも取扱いがあります。そういう点からも地域内で地元産食材を使った昼食等を来訪者が楽しめることは、受入者との交流が一層広がることにつながるものと考えられます。農家レストランとも関連している山古志弁当ですが、「やまこしありがとう通信・第10号：平成21年10月8日発行」

には初動期支援としての、弁当関連記事がありました。これによれば「山古志住民会議事務局」の支援内容がよくわかり、同第13号では「第四回山古志弁当相談会」の様子も紹介されていました。この「やまこしありがとう通信」は編集人「長岡地域復興支援センター山古志サテライト」、発行「山古志住民会議事務局」となっていますので、山古志サテライトの地域復興支援員による弁当開発事業支援と同通信の編集作業もよくわかりました。

(4) 農産物直売所

2010年10月現在、地域内の農産物直売所は10カ所以上におよんでいます。開所されない集落もありますが、おおまかな傾向としては各集落に散在して展開しています。この農産物直売所に関する詳細な「研究概要」は他の研究員から別途公表の予定となっていますので、本稿においては都市農村交流上のひとつの分野を担っているものの概要の報告にします。

また報告内容は、主に2009年夏に取材した内容のものが中心となっています。このところ人気上昇している『農産物直売所』においては、地元の野菜を中心とした特産品が販売されて来訪者の期待に応えている状態ですが、直売所に詰めている受入者である地元の方は、来訪者の対応で店番同士で会話もはずみ、品選びしながらそれを見聞している来訪者は買物のほかに地元のヒトの人情にも接して、日帰りだけ、買物だけという短い時間ながらも「ふれ合いと親睦」が発生して、これら全体が交流となっていました。この地元野菜、特産品を仲立ちとして、栽培状況、収穫状況、調理法などに話題が展開していて地域紹介の部分もありました。

また無意識のうちに地元の生活システムの一端を紹介していることになると考えられますが、春の山菜、夏の野菜、秋の米・きのこ・あけび、さらに加工品である漬物、塩詰め品、手づくりこんにゃく、神楽南蛮

味噌、保存されたクルミ、きのこ塩蔵品、などの多彩な品々が販売されています。来訪者数は天候による変動、季節的な変動、などで変化はあると考えられますが、集落の方々はおおむねコンスタントに開店・開所していました。副業的なものと考えられますが、今後も継続されていくことが予想される「地域の内外の交流の場」と考えられました。特産品等の直売から地方発送にも繋がっている模様で見本市の性格もあると考えられました。これらの直売は、産地直送、あるいは産地消費地連携にも繋がる可能性もあると思いますが、販売・流通にも関連してくる交流上の分野だと考えられます。

一方、山古志地域内での直売所方式とは別に個人的あるいはグループ的な販売ルートから軽トラックを利用して長岡市内の市街地への「引売り」もあると聞きましたが、物流に属してくると思われしますので本稿の交流という点からは、少しはずれますので記述としてはここまでとします。概ね5月から10月まで開かれる直売所は、農産物の栽培・収穫の時期とも重なり副業的なものであるとはいえ相当に多忙になると想像されました。天候などの影響による客足の変動、晴天・雨天のような山と谷、そういう背景があると思いますが、ここでの交流は、①来訪者に対してはアンテナショップ、②開所者同士では集合して意見交換ができるサロン・地域内の交流の場という性格を持つものと考えられました。

2-2 被災地視察会、山菜まつり等

(1) 被災地視察会

この「被災地視察会」は、教育体験旅行での「被災現場見学」とほぼ同様のものと考えられますので、交流の事例として取り上げています。長岡市内に事務局のあるNPO法人中越防災フロンティアが主催していますので、同NPO法人の平成21年1月作成のリーフレッ

ト等によってその概要及び案内実績を引用・記述します。①被災地視察会の概要:中越防災フロンティアでは、「地域の防災力、個人の防災力」を高めるために中越地震の被災体験、災害や防災に関する知恵や情報を伝えるための「中越地震・被災地視察会」をコーディネートしています。行政・企業・団体内の職員、研究員の皆様に中越地震被災地の復旧の現場、復興の様子を体感させたい、子供たちに被災地の復旧現場を体感させたいといったご要望をサポートしています。

②案内実績:以下によります。

- ・2006年度 (H18年度), 662名, 18団体
- ・2007年度 (H19年度), 387名, 15団体
- ・2008年度 (H20年度), 450名, 14団体
- ・2009年度 (H21年度), 365名, 14団体
- ・2010年度 (H22年度), 220名, 10団体 (上半期まで)

同NPO法人からの聞き取りによりますと、視察する団体等の要望によってかなりきめ細かく視察計画に応じており、案内者についても一般的な説明から高度・専門的な説明まで対応できる人材を用意しているとのことでした。地震被害の状況、復旧工事の工法、斜面の土質・地質上の特徴などの解説が含まれていて、各団体に応じた視察内容であることがよくわかりました。場合によっては被災集落の区長さんから、解説や被災体験談などをしてもらうこともあるそうです。2009年度に案内した団体は、主に国内の自治体議員、自治体防災担当職員・消防職員、社会福祉協議会、児童委員協議会、町内会、高校生の団体などとなっています。滞在時間的には1日コースまたは半日コースとなっていて、山古志地域内での昼食の場合もあり、そういう場合には、被災体験談や養鯉生簀等の復旧談などがあつたり、養鯉生簀での錦鯉見学などが飛入りで行われることもあるそうです。

主な視察地点としては、「妙見土砂崩落・復旧現場」、「朝日川の河道閉塞・復旧現場」、「竹沢・復興公営住宅

団地」、「棚田復旧現場」、「R291被害・復旧:山古志トンネル」、「芋川の河道閉塞・復旧現場:新宇賀地橋架替」、「芋川の河道閉塞・復旧現場:木籠集落水没家屋・木籠橋」などが対象となっていました、以上が被災地視察会の概要の報告です。

以下は筆者のコメントではありますが、視察内容・案内対象が復旧関連に比重が置かれている印象であります、被災地点の案内図、中越地震の概況などに関する資料は充実していました。従って復旧を起点とした復興過程の説明も充実していると思います。特に防災事業等に携わる関係者には効果的な視察会だと考えられました。例えば新潟県外の方であれば、地震発生当時の概況からの案内・解説によって復旧・復興の一連の流れと共に、現在の状況と防災上の知見が伝達される効果が期待されます。地震発生から6年が経過した現在、十分に整理された情報が必要になると考えられますので、同NPO法人に蓄積された情報も非常に重要になると考えられました。

また同NPO法人は、冬期の雪かき道場事業も行っていますが、「越後雪かき道場2010」のチラシによれば、「高齢化が進む豪雪地帯で広域的な支援を受けるため、除雪ボランティアに対して知識習得、研修の場や受け入れ訓練の場を提供するとともに、継続的な都会と地方の体験交流の場となるよう、全国へ除雪ボランティア育成の取り組みを発信します」としています。照会・参加の受付窓口となっていますが、2010年の開催として、新潟県内では2月に十日町市と旧川口町で、県外では1月に山形県村山市で開催された模様です。そのほか予定として同様の雪かき道場が、岐阜県高山市、長野県飯山市で開催が計画とのことでした。新潟県下越地方の非多雪区域に住んでいる筆者の感覚ですと、1963年・昭和38年の「三八豪雪」を経験したことから、大量な降雪の場合「雪ほり」、「雪おろし」の感覚があつて、「雪かき」では少々軽い印象がありましたが、体験交流とか雪になじむという点から再考しますと、やむを

得ない命名と納得しました。さらに「雪かき道越後流指南書」という冊子も発行されていますので、この「雪かき道場」から連想を広げていけば、豪雪地帯での生活の一端を紹介するものとして、「冬の雪かき」は体験メニュー上でも有効なものになると考えられました。

(2) 山菜まつり

2010年5月1日の土曜日、NPO法人「よしたー山古志」主催の「春の山菜まつり」に参加しました。当日は晴天一時曇り、多少風有り、気温16度程度の天候。集合場所及び主会場を池谷の山古志闘牛場として、参加者約40人、運営スタッフ約30人程度で開催されました。事務局長の川上巖さん、続いて池谷区長の青木幸七さんの開会挨拶のあと山菜観察遠足のスタイルで開始されました。晴天でしたがまだ残雪があり、今冬の多雪とその期間の長さが想像されました。参加者は健脚コース約25人、ゆったりコース約15人ほどに分かれて、案内者の先導と山菜観察の説明を受けながら進行了しました。足の装備も関係しますが、筆者は長靴だったので、ゆったりコースのグループとしました。このコース分けは妙案だと思いますが、健脚、ゆったり脚（悠脚）の分類、参加人数に応じて並脚を加えてのコース分けは、この山菜観察遠足スタイルを定着させる手法になると考えられました。参加人数と案内メンバーに応じて行先など選択する際に、非常に効果があると考えられました、参加者は体調・体力などに応じて選定が可能になります。2009年は、春の到来が早かったことも影響して参加者が150人程度だったそうですが、その年によって、山菜の発芽量や参加人数の変動もあるのが、この祭りの特徴でもありました。大きく影響するのが昼食準備だと思いますが参加予約で大枠がきまり、当日の飛び入りに関しては予備の加減によって対応している模様でした。昼食準備は運営スタッフの女性の方々がおもに分担していました、また受付等の会場設営には長岡技科大ボランティアグループの学生さんによる

支援もありました。このまつりの第一の目的である山菜は、芽吹き・生育が平年より約2週間位遅れているとのことでしたが、会場ではフキノトウ、コゴミ、かぐらなんばん味噌などが直売されていました。参加者の期待等を考えますと微妙な部分がありますが、地域内ではゼンマイ、ワラビなどの山菜栽培を行い、収穫物として出荷・加工しているという事例もある昨今、直売されているものを購入することでお土産にすれば、後述する山菜づくりの昼食を楽しみ、野山で山菜及び自生植物の観察とその解説で、まつりを充分堪能できると思います。そういう点からも「春の山菜まつり」と命名（ネーミング）したものと想像されました。時期をえらべば農産物直売所でも販売されるわけですので、そのタイミングを待つことになると思いました。さて、ゆったりコース：「行って来いのルートで約1km」ではキシミレ、フキノトウ、ワラビ、カタクリ、アサズキなどが観察されました、自生の姿とそれの解説は非常におもしろく山菜の知識が増えました。山菜に関する解説本は多数出版されていますが、筆者として欲をいえばチラシがあれば、さらにおもしろく家に帰ってからの「みやげばなし」のネタになるのではないかと思います。筐は多数自生していましたが、旧村の花であるハギは発見できませんでした。

ハギは10月上旬に花をつけるそうですが、2010年の夏になってから池谷集落の北方向の国道沿いに自生しているものを夏の研究合宿で教えてもらいましたが、その後秋になり発見・観察しました、紅紫色の1センチ位の花は、風情有りました。開花期間は短く約1週間くらいかと想像しました。その後、長岡市内の新潟県立近代美術館の屋上庭園にもあることが判明しました、枝がしだれるので、葉張りが大きくなり周囲を手入れしてようやく、モッコリした姿を鑑賞できることがわかりました。いわゆる小道（小径）の側面にあるとその姿が印象的になるのではないかと考えられました。新潟市内にある新潟県立鳥屋野湯公園にあるハ

ギは、開花期間が終わると、バサリと刈込して管理してました。まつりの主会場になった山古志闘牛場は、旧村の木ブナの林のなかにありますが、萌木色の葉を堪能できました、樹高も高く目測ですが12m～15mはあったと思います。山古志闘牛場から離れた場所にもこのブナ林が点在していますが、「村の木」とされただけに見事な林でした。ブナ若木の植栽活動が行われている模様ですがこの展開も期待しています。2009年度に改修工事の行われたこの闘牛場は、3月の研究合宿の時点では残雪の為外部だけの見学でしたが、5月の今回のまつりで内部まで見学ができました、牛の角突き観戦用の座席に座ってその感触等を味わってみました。第二の目的の昼食ですが、ひとことで言えば豪華・美味でした、ごはんは山古志産コシヒカリ、そして副食は越後牛カレー、山菜天婦羅（コゴミ、フキノトウ、ヤマウドなど）、きんぴら（ヤマウド、ミズ菜等）、ワラビおひたし、山菜入り豚汁などでしたが、十分に堪能しました、昼食準備のスタッフの皆様ごちそうさまでした。またこちらレシピのチラシがあると助かりますが帰宅後のみやげ話のネタの為です。晴天のもと疲れない程度に歩き、そのあとの内容たっぷりの昼食によって、この「春の山菜まつり」は非常に充実してました。場合によっては昼食のみコースもあるかもしれないと考えられましたが、「味」のほうはかなり完成してきている印象でした。

南北約10km、東西約9km、の山古志地域は、国道及び県道を車で走って回れば概ね半日位ですが、そこから現市道（旧村道）に入り、案内・解説をしてもらい体験・滞在すれば、場合によっては1日以上時間が必要になると思われます。そういう点で時間と手間がかかりますが、今後手間をかけた体験・滞在に向けた地域の案内等も注目されると考えられました。同法人はこのほかにも、「山菜園づくり（ヤマウド植付け）」、「ヤーコン植付け・同収穫」、「(2010) 歌声喫茶ともしび in 山古志」なども主催して、交流活動、イベント活

動も行っています。またその歴史をたどると、「(設立の経緯)：20数年前、『ほうきんとう』というグループがあった。村おこしとして、ナイトウオーク、劇団などの活動を行ってきた。もう一度集まり、皆で村おこしをしてみようという有志が集まり、中越大震災で大きな被害を受けた新潟県長岡市山古志地域の復興と発展を図るため2006年11月に『NPO法人よしたー山古志』が結成された。(具体的な活動としては)：(・) やまこしありがとうまつり（秋のキノコまつり）において催しを開催。(・) 大久保集落において、水源消失のため荒廃の恐れがあった棚田に植えつけたヤーコンを地元住民と収穫。(・) 山古志闘牛場において春の山菜まつり開催。などが挙げられる。こうした活動のほかに、山古志の特産品の開発なども行っている。」とありますが、あの超大作である山古志の地形模型を作った『ほうきんとう』を引き継いでいる点も注目されると思います。以上の引用は〔速水検太郎（2009）「中山間地域における復興まちづくりの展開に関する研究」芝浦工業大学・卒業論文〕によりました。

(3) 山古志ウオーク

新潟県ウォーキング協会主催の「2010 越後長岡ツアーデー マーチ 山古志&良寛ウオーク」が、2010年9月18日（土）～19日（日）に行われましたが、1日目の「山古志ウオーク」について協会発行のリーフレットから記述します。集合場所：長岡市山古志支所駐車場、スタート・09:30、コース：①23km（ロング・健脚コース）、②11km（一般・並脚コース）となっています。山古志支所がメイン会場・本部となり、スタート・ゴール地点です。コース略図によれば、①23kmコースでは、スタート→虫亀集落→風口峠→猿倉岳→萱峠展望台→あまやち会館→種苧原集落→（寺野）河道閉塞地点→池谷集落羽黒トンネル→ゴールの経路で地域の北部を周回するもので、高低差が400m以上あって健脚者向けとされています。他方②11kmコースは、スタート→竹沢集落

→古志高原スキー場→山古志トンネル→木籠集落→(木籠)河道閉塞地点→羽黒トンネル→ゴールの経路で地域の南部を周回するものです。

コースのルート図をみると地域内の幹線道路を利用していますが、普段は車両等での通過が多いところを徒歩で行くこのウォーキングは、景観の体感を含めて、沿道の地形・植物の観察、さらに地域内再訪問には最適な企画で、街並み散策に対応した「地域内ウォーキング」と考えられました。19日付けの地元新聞・新潟日報によれば、「色づく棚田 歩いて満喫」とありましたが、この記事からも幹線道路からの眺めは晴天に恵まれて、参加者は地域の景観などを堪能したものと想像されました。その参加者は新潟県内外から約700人となり、健脚コース・並脚コースはほぼ半数づつだった模様です。参加人数的には2008年度から下がり傾向の模様ですが、それでも「チェックポイントでは、地元住民がお茶や軽食でもてなした」とあり、さらに今後に向けて定着していく行事だと思われました。新潟県ウォーキング協会にも照会しましたが、

傾向としては人数的には下がり気味とのことでしたが、このウォーキングは人気のイベントで各所で開催されているそうです。そういうなかでこれだけ参加があったことは、やはりこの地域が注目されていることの表れだと考えられました。

なお新潟県ウォーキング協会は、「歩こうNIIGATA 大作戦本部事務局」も兼ねていて、健康食育推進分野で「歩こう」を応援しています。筆者の個人的な見解ですが、参加者のなかには、別の機会に国道・県道から枝分かれした市道に入り、各集落内の散策、花壇鑑賞、神社等見学にいくのではないかと想像されましたが、これは都市・市街地の「路地めぐり」に相当し、いわゆる「暮らし方・暮らし技術」の体感・発見へのつながりです。このイベントに参加した人がおこなう、ウォーキングした時の感想やその時発見した眺望のポイントなどが、山古志地域を広報することにつながり、ウォーキング

(大会)という形の交流は間接的なやりとりであっても、おおまかな、アウトライン的な地域の紹介につながり、「集落内の神社等の見学」は、「暮らし方」の体感という新たなツアー要素になると考えられました。

(4) 震災復興 中越まるごと じまんいち

「震災復興 中越まるごと じまんいち」が、2010年3月6日(土)・7日(日)の両日にわたり、新潟市西区山田の「新潟ふるさと村」で開催されました。キャッチフレーズは、「中越のうまいもん・たのしいもん・きれいなもん：全部まるごと自慢市」とありましたが、主催は新潟県長岡地域振興局です。

これは、「地域外で展開する物産展」という分野になると思いますが実行はかなり大変だと考えられます、関係する団体の広範囲な参加によって可能になるとされていますが、県内での実績をもとに、首都圏や関西圏での開催で新潟県外を舞台とする、「出かけていく形の交流活動」に発達することが予想されます。その手がかりにもなる、「震災復興中越まるごと じまんいち」でした。同時開催として「第5回地域復興交流会議：主催：社団法人中越防災安全推進機構」がありました。それぞれの共催は、財団法人山の暮らし再生機構です。

筆者は3月6日に見学に行きました。新潟市内での開催の為でしょうか、出展者は非常に張り切っていました。当時のリーフレットを見ながら記述していますが、内容が実に豊富なことと、関係団体のほとんどが出展した模様でした。詳細は、「中越防災安全推進機構」のURLに記録が残っていると考えられますので、おおまかな概要だけの報告とします。この「新潟ふるさと村」は、いわゆる「展示・交流・物産館」で、国道8号線の沿道に立地して、大規模な駐車場を持ち、敷地内をザックリと分類すれば、屋外展示場とバザール館及びアピール館から構成されています。屋外展示場には「屋外 旨いもん横丁」、バザール館には「屋内 旨いもん横丁」「お米横丁」及び「特産品横丁」が並び、復興バ

ザールとして「中越各地の食材、特産加工品、実演販売」などを行っていました。アピール館では第5回地域復興交流会議として、関連の各団体が出展して活動内容を紹介していました。こういう形式でのアピールは、特に中越地区から離れている他の市区町村の住民にとっては復興の過程・進捗状況を知る上で、非常に効果があると思われました。いわゆるマスメディアに登場してくる関連の諸団体と特産物が、一同に並んでいて同時に体感できることなどの利点がありました。また3階シアターホールでは映像アーカイブ上映として、中越地震復興記録映画「1000年の山古志」が時間制で無料上映されていました。このホールに於いて午後からは、新潟日報社ふるさと復興キャンペーンのトークセッションとして、「それぞれの『希望（ひかり）』」が開催されたのですが、筆者の見学は午前だけの予定としていましたので、残念ながら見逃してしまいました。しかし後日、新聞報道でその内容が紹介されましたので、若干その内容を記述します。開催日時：2010年3月6日・午後1時～3時、開催会場：新潟ふるさと村アピール館3階シアターホール、内容：基調報告「つなごう山古志の心『やまこし夢プラン』について」（長岡市山古志支所地域振興課長兼復興推進室長：齊藤 隆氏）、交流トークセッション「女性たちが見た『希望（ひかり）』」、[出演者：五十嵐なつ子氏、鈴木京子氏、片岡朋子氏、上村順子氏、コーディネーター：小野沢裕子氏]。新聞報道からの二次的な報告ですが、基調講演のなかで、齊藤 隆氏が強調したことは、『そして一番大きな成果は、集落の人が自分の言葉で自分の思いを話せる場ができたことだ。結果はなかなか見えなくても、同じ思いの人がいることを確認できることが大きな意義を持つことだと思う。』としています。また『「やまこし夢プラン」は、どうしたら山古志らしく生活できるかという理念。長い人は3年、避難生活を送りながら、外から山古志を冷静にみた。そこで生まれた新しい気づき。それを今後には生かそうと、住民、行政、大学の

先生、支援団体などから成る「山古志住民会議」で意見を出し合って昨年2月に作成した。』と述べています。交流トークセッションに関しては、新聞報道での見出しを引用させてもらいますが、「震災は人生のターニングポイント」、「母ちゃんの取り組みを父ちゃんが応援してくれた」とまとめています。全体予定で2時間の総括イベントだったので、語り尽くせない部分もあったかもしれませんが、キーパーソンそれぞれのふるさとへの思いが記事となっていました。

(5) その他の交流事例について

2009年度から、山古志観光協会による「山古志観光ガイド」の申込受付が開始となりました。案内書からの記述ですが、詳細は相談によるそうです。メニュー的には①DVDの視聴（山古志地域震災資料映像：山古志サテライト内）、②中山隧道（手堀りトンネル）見学（※隧道保存会によるガイド）、③被災集落（水没箇所）見学（水没した木籠集落です）、④闘牛場（闘牛の会場を案内、闘牛大会以外の日は観光闘牛）。②から④についてガイドが同行し案内。コースとその組み合わせ等は相談によるとの案内でした。山古志サテライトが中心となって、ガイドの知識やコツを話し合う「山古志ものしり座談会」を実施しているとのことでした。

新聞記事からの記述ですが、2010年10月8日付け毎日新聞によれば、「山古志のコメを三宅島に、住民有志が田づくり深まる被災地交流」とあります。内容的には、2009年夏山古志の住民と中学生が三宅島を訪問、その際「島に水田が無いことを知った」そうです。それで2011年度には、荒地約2,000㎡を水田化して田植え、稲刈り、収穫後にコメを学校給食に使ってもらう計画にしたそうです。「島外からの目で水田が無いことを発見」、「地元へ帰り荒地を水田化する」、「地元で作ったコメを送る」。発見から始まる新しいこと。それまで続けてきた被災地交流に新しく加えていくという形の交流。筆者は脱帽します。旧山古志村は新潟県中越地震

で2004年10月に全村避難。東京都三宅島は2000年7月の噴火で全島避難。中越地震直後に、避難中の島民が激励に駆けつけて以来続く交流に新しいページが加わったものと思いました。

一方地元新聞：新潟日報（2010年11月23日）の記事によれば、新潟県提唱の取り組み：(2010年) 防災グリーンツーリズム全体交流会が、11月21・22日に小千谷市で開催され、神奈川県川崎市、埼玉県蓮田市の自主防災団体関係者、新潟県の自治体職員ら約80人が参加した。この取り組みは、「首都圏の住民と日頃から交流を図り、災害時に本県を避難場所として活用してもらう」ものとされています。2004年の中越地震の教訓を基に、災害への備えなどについて、パネルディスカッションで意見を交わし、長岡市妙見町の崩落現場などを視察した。とありました。(2009年)は柏崎市、(2008年)は長岡市山古志で開催された模様で、今年は3回目とありました。こうしてみると、観光ガイド及び交流会関係も多彩に開催されていることがわかりました。

3. 都市農村交流に関して

(1) 交流に関して

地元新聞・新潟日報の2010年11月の記事に長岡支社「メディアぷらっと」2周年に関して「市民交流」という言葉が登場していましたが、文脈から把握しますと「市民が集い、ふれ合い、(人と情報が)行きかう、こと」と理解されました。またNY市(ニューヨーク市)「国際交流拠点」の記事の内容を併せて把握しますと「国際交流：国際間においての人と情報の行きかう状態・活動」と理解されました。この交流という言葉は一般的には「交流：異なる地域、組織、系統に属する人や物が互いに行き来すること。人事交流、文化交流」とされています。そのとおりだと考えられますが、実態上の「集い、ふれ合い」部分が表現されていないような印象です。相対化をめざして英単語に置き換えますと

「exchange」などが登場してきますが、この単語は物の交換の印象が強いように考えられます。交流上贈り物の交換は考えられますので、例えば生産・販売とつづく農産物の場合であれば、販売の意味があると実態に近くなると考えられました。「interaction」の場合は、相互作用、相互の影響とありますが、この場合は相当に広く抽象的なものを示しているように思われます。今後も探索を続けたいと考えています。「食料・農業・農村基本法(1999)」の第36条では(都市と農村の交流等)「国は、国民の農業及び農村に対する理解と関心を深めるとともに、健康的でゆとりある生活に資するため、都市と農村との間の交流の促進、市民農園の整備の促進、その他必要な施策を講ずるものとする。」とあります。残念ながら解説までは発見できませんでした。しかし[食料・農業・農村白書(平成22年版) pp253-260]・都市と農村の交流の取組(都市住民の農業・農村へのかかわり方についての意識・複数回答)によれば、「①地域農産物の積極的な購入での応援(85.3%)、②市民農園等での農作業(39.0%)、③グリーン・ツーリズム等で出向いて応援(35.1%)、④援農ボランティア等での応援(20.2%)、⑤農業しないで農村に住む(6.6%)、⑥今後農業に参入したい(6.3%)、⑦農業とはかかわりたくない(3.2%)。()の数字は、農水省『食品及び農業・農村に関する意識・意向調査』(2010年4月公表、組換え集計、複数回答)」とあります。微妙な結果かもしれませんが、農産物の購入は大きな比重を占めていると考えられます。

そういう点からも、人と人との「おつきあい・つながり」だけでは地元への経済的効果があまり期待できないと考えられますので、「『都市・山村交流の概念』では『直売と協定』の概念が含まれている」ことに倣い、本稿では、筆者の仮定ですが、「都市農村交流：都市住民と農村住民との間の、①『であい・ふれあい・やりとり・往来・おつきあい・つながり・有縁』および②『農産物等の産直・直売による販売・購入』」と仮定して記

述を進めます。農村と都市の位置が入れ替わっても同議と考えていますが、長野県飯田市では、「観光」とは一線を画すという立場から「農都交流」という理念で実践を目指していると聞きました。イメージとしては理解していたつもりでしたが、その内容把握については不十分な点がありますので、今後も概念及び用語の使い方についての調査は続けたいと考えています。

農家民宿、農家等民泊について部分的に報告した経緯がありましたが、いままでの取材・研究内容を「交流」の分野として整理したことで、関連する概念が漸く部分的に整理のついた状態です。関連する概念とたくさんの実践が進行中ですので、その整理内容はまだ中途半端ですが、この機会に関連する用語について若干言及して、周辺用語の紹介とします。

「農村観光：ルーラルツーリズム」、「都市観光：アーバンツーリズム」という用語がありますが、これらはそれぞれ農村、都市を対象の地域としたツーリズムで各種のツアーを含んでいるものと理解しています。アーバンツーリズムには、例えば「東京スカイツリー：ツアー」などが含まれてくると思います。この東京スカイツリーが立地している地域及びその地元商店街などの振興が、実現可能なものを総称してツーリズムといえるものと考えます。また「江戸東京野菜：ツアー」なども来訪者によって、東京の野菜栽培地域の振興が期待されるものと考えられます。そのほか「医療ツーリズム」という用語もありますが、例えば「人間ドック」と「その後の温泉旅行」を組み合わせたものの場合、それは人間ドック健診と温泉旅行を組合わせただけのもので、地域の振興との繋がりには薄いと考えられました。また〔敷田麻実編著(2008)「地域からのエコツーリズム」〕によれば、「ツーリズム：ツアーをつくり出し、実践する仕組み（関係者や制度などで構成されている全体）や考え方のこと。ツアー：旅行のこと」とありましたが、「ツーリズム」という用語は多様な使われ方がありますので、使用上は単純に「観光交流」と

して良いのではないかと考えられました。ツーリズム事業（観光交流事業）と単純化した表現がわかりやすいと考えられました。同書では、エコツーリズムを「自然環境への負荷を最小限にしながらそれを体験・学習し、目的地である地域に対して何らかの利益や貢献のあるツアーをつくり出し、実践する仕組みや考え方」としています、正確さを志向した結果と考えられました。関係法令では若干相違した内容です。注1)

1992年農水省のグリーン・ツーリズム研究会の中間報告書で「緑豊かな農村地域において、その自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動（農村で楽しむゆとりある休暇）」とされているところのグリーン・ツーリズムは、最終報告書はまだ出ていないながら、十分に定着した用語だと考えられます。〔青木辰司著(2004)「グリーン・ツーリズム実践の社会学」〕によれば、「『日本型グリーン・ツーリズム』の典型的な事例として①『農村民泊』、②『ワーキングホリデー』、③『地域ツーリズム大学』の三つである。～中略～こうした中で、前記の3つの新たなグリーン・ツーリズム実践手法は、文化的、制度的、意識・規範的制約条件を踏まえつつ、具体的な実践が可能であることを証左しているのである。」とあります。また大きな投資を必要としないでチャレンジできるものとして、〔山崎光博著(2004)「グリーン・ツーリズムの現状と課題」〕によれば、「『農家民宿（ファーム・イン）』、『農家レストラン』、『農産物直売所』、『農産加工品の販売』などがあります」としています。中間報告から約20年が経過している現在では、多様な実践がすでに展開されていること、その理念も時代背景と共にダイナミックに展開しており、NPO法人グリーンツーリズム・ネットワークセンターの主催で、2004年から毎年全国大会が開催されて、実践と理念の構築が進められているところですが、そういう背景が関係していることもあり、グリーン・ツーリズムの対象事業は広範囲でその事業も大規模なものが多いという印象があります。また長い蓄積を重ねた

事例も多く、そうした事業継続とその成果には敬意を持つものです。このような成果は、長期間にわたる取り組みと投資があって実現されたものと想像されました。当然、その地域の自然条件、社会的条件のもとの合意形成があって展開されたものと思います。またビジネスとして考えた場合は、[井上和衛・(2004)「都市農村交流ビジネス」]においては、「都市農村交流・グリーン・ツーリズムに依拠した新たなビジネス（以下、都市農村交流ビジネス）おこしの取り組みが進んでいます。」とあります。かなりおおまかにそのビジネスを紹介していますが、約70ページの冊子の最後においては、「都市農村交流ビジネスが、地域活性化につながる地域内発型アグリビジネスとして存続していくためには、単に経営の効率性を追求するだけでなく、地域資源の活用、地産地消の観点を堅持していく必要があります。すなわち、安易に外部資本に依存した規模拡大や市場原理一辺倒の事業展開を図るべきではなく、地域の自主性に基づく協同の力に依存した事業の取り組みが大切です。」と結んでいます。以上のように、多くの種類の関連用語と概念があるわけですが、目的とするところは、「その事業が展開する地域の『生活の質の向上』実現」にあると考えられますので、これらは総じて「地域づくり」上の産業活動および文化・交流活動のそれぞれの分野に影響を与えながら展開されるものと考えられました。

(2) 筆者注目の地名付きツーリズム

新潟県内で実践されているグリーン・ツーリズムのなかで、「地名等+ツーリズム」のスタイルで注目される事例について、筆者は2010年8月に新潟県柏崎市高柳町と、9月には新潟県胎内市を訪問・見学しました。柏崎市高柳町の場合は、関係部署への訪問は日程的に無理でしたので行いませんでしたが、地域内を視察しました。その対象は、①「荻ノ島かやぶきの里」、②「公営じよんのび村」、③「県立こども自然王国」、最後に

柏崎市高柳町事務所庁舎の外観を見学しました。以下地名は「柏崎市高柳町」と表記して記述を進めますが、この地は「(高柳風) じよんのびツーリズム」で有名です。「じよんのび」とは新潟地方の方言で「のんびりした、ゆったりした」という意味です。①「荻ノ島かやぶきの里」では、かやぶき屋根の民家約13軒が円形に連なる「環状集落」を一望し、道づたいに一周してみました。円形の輪の中は水田という環境にある集落は壮観でしたが、なかなか訪問・見学できなかったこともあり、しばらくそこで休みました。集落の入口にある神社「松潟社」は境内の清掃が行き届き、樹木も鬱蒼として日陰が心地よいものでした。同じく集落の入口にある「荻ノ島集落センター」が案内所になり、トイレを借りたり、休憩したりする建物となっていました。「環状集落」の環境保存用と思われる募金箱がありましたが、筆者の感覚では対面募金とし奉賀帳を保存して、使途の明示や環状集落の配置図なども配布するようお願いしたいと思いました。当然に人手が必要になるとは思いますが、そこまでしないと募金の実践はむずかしいと考えられました。かやぶき屋根の民家の維持はコスト的にも大変なことと想像されました。また新しい建物である、「かやぶきの宿」、「かやぶきのギャラリー（陽の楽家）」もおおまかに見学しました、詳細をメモできませんでしたが、これは必見の建物だと思いました。ここの集落の訪問・見学に関しては、「必見の価値がある」と考えられますので、ここの案内文・解説文・これまでの歴史的経緯の記述文などチラシで充分ですが準備していただければ、もっと充実したものになると考えられました。帰宅後住宅地図を確認しましたところ、かやぶき屋根民家には「中西姓」が多く、もともとは中西氏一族の集落ではないかと想像しました。この荻ノ島集落の南の方角の、門出和紙で有名な門出集落の「門出かやぶきの里」は見学しませんでした。②「公営じよんのび村」は、もと町営の施設群ですが物販、宿泊、交流・入浴、農産物直売所、民家型貸別荘の各建物群

が、広い敷地の中ににそろっていました。保養・養生・レジャーがここで一度に済ませることができる、リゾートエリアといえる広大な敷地のなかの施設群で、当然ですが広い駐車場が用意されているものでした。建物が新しいということもあり、建築年度等の施設概要の記録をとることはしませんでした。なにか雇用の場をつくることも企画内容にあるような印象がありました。隣接して、子供向けの宿泊・研修施設③「県立こども自然王国」がありましたが、外観の観察だけとしました。こちらも広大な敷地のなかの大きな建物でした。これだけ大きな施設群に滞在すれば、「荻ノ島かやぶきの里」などの他へ行く時間がなくなってしまうような印象がありましたが、「(高柳風) じょんのびツーリズム」でのツアー対象項目は、まだほかにもありましたが割愛しました。帰宅後の反省ですがせめて一日間程度は滞在して、歴史的な流れ、先人の取り組みについての掘り起こし作業が必要だったことがそのポイントです。以上が不十分な点も残った、柏崎市高柳町の訪問・見学の結果ですが、「地名等+ツーリズム」のスタイルによれば、その後の展開に際して新しい項目を加えても、そのツーリズムの全体に包括されると考えられました。

胎内市の場合、農林水産課交流係の方に面会してお話を聞くことができました。胎内市でのグリーン・ツーリズムの特徴などについてのヒアリングの結果を以下に記述します。旧黒川村は、「胎内スキー場と大規模農村リゾート」としても有名でしたが、平成17年9月に中条町との合併で、胎内市黒川地域となりました。2009年度以降、ツーリズムの調査等を行ってきていましたが、「胎内型ツーリズム」という(地名+ツーリズム)のネーミング(命名)に注目していました。ヒアリングで判明したことは、大規模農村リゾート地区でもあった胎内川の上流部分に、新たに展開するツーリズムを、バブル経済崩壊後の時代に合わせた、小規模なものに変換し「リゾートからツーリズムへ」を示すものとし

て選定した模様でした。いわば黒川・胎内リゾートから胎内市・黒川地域ツーリズムにシフトした意味があるものと理解しました。胎内市の代表的なものを紹介するというよりも、「小規模型(黒川風)ツーリズム」という意味ではないかと想像しましたが、地名の利用方法としては新しい発見でした。旧黒川村は、筆者の住んでいる新発田市内から約25km位、車で約30分程度のところで、距離的に近いので関心はもっていました。また時々には訪問して施設の部分的な見学等を行っていました。特産物としては、「黒川畜産団地」からの畜産加工品(胎内ハム、胎内ジャージー乳製品、胎内高原チーズ、胎内高原の水)、十全ナス、やわ肌ネギなどがありました。また農林水産課交流係が入っている建物、元胎内パークホテルは現在では「胎内アウレツ館」として宿泊研修及び体験学習・合宿施設に再利用されていました。ヒアリング中のコメントからこちらでのツーリズムの特徴を示すものを記述します。

- (・) 農家民宿はありません。(これだけホテル等あります)
- (・) 冬のツーリズムアイテムはスキー(まだお客はあります)
- (・) クズ(葛)を「てんぷら」にして食べるグループ有。
- (・) ソバは作付しています。
- (・) 東洋大学：青木辰司教授には数回にわたり市内で講演してもらいました。
- (・) 胎内川は胎内市を東西に横断して日本海に達しています。
- (・) 東北ツーリズム大学のサテライトキャンパスを開催。
- (・) 「胎内型ツーリズム」を推進し、地域づくり活動を行っている「胎内型ツーリズム推進協議会301人会」は胎内市の人口が約30,000人でその1%の関係者ということで「301人会」となっています。

また当日いただきました資料によれば、教育旅行の受入れでは、①首都圏の中学校の林間学校、②新潟市内専門学校の宿泊型体験、③「ふるさと体験学習」として胎内市内の小学校の宿泊体験を実施。胎内市は東

部が山、西部が海ですので、海・山の間で交流が行われることとなります。そして胎内型として、1) 新たに大規模な投資をしない。2) 農業の魅力伝える。3) 観光とうまく結びつける。4) 仮説と検証を繰り返し成長につなげる。5) 子供の未来が真ん中にある・お母さんのお腹の中(胎内)。とその特徴を示しています。また「青木辰司著(2010)「転換するグリーン・ツーリズム-広域連携と自立をめざして-」」においても、この「胎内型ツーリズム」が紹介されています。以上、報告しました地名付ツーリズムは、おおむねその地域の特徴・特色を強調することによって、特定のテーマだけにしぼらないという側面があることが理解され、参考になる考え方ではないかと思われました。

(3) 「やまこし夢プラン」関連のこと

「やまこし夢ぶらん(つなごう山古志の心)」と「同・行動計画」の冊子は、山古志住民会議の編集・発行でそれぞれ、平成21年2月と平成22年2月に公表・刊行されました。その後それぞれを筆者も読みましたが、本稿で都市農村交流を記述するにあたり再度時間をかけて読んだところです。内容的には「同・行動計画」の方が具体的なのでわかりやすい印象で、会議の各会議事録も掲載してあり、臨場感あふれる内容でした。この「やまこし夢ぶらん(基本構想・行動計画)」には、「やまこしありがとう通信」が平成19年12月7日発行の創刊号から平成22年3月5日発行の第13号まで掲載されており、山古志地域内での動きも併せて記載されていました。この「やまこし夢プラン」と併せて「やまこしありがとう通信」とこれらの編集・発行事務を進め、各会の会議進行などを行った「山古志住民会議・事務局」が関連の「3点セット」になるものと考えられます。事務局は山古志支所復興推進室と長岡地域支援センター山古志サテライトのメンバーが運営していますが、相当ハードな事務だったと想像されました、というのも会議でのグループ別討議の結果で両論併記されている

議事録もあることから推察できます。筆者の情報収集に関していえば直接取材に偏した傾向があり、発行されていた「やまこしありがとう通信」に記載されていた内容の把握に遅れがありました。これはじっくり読んでいる過程で気がついたものですが、ほぼ毎月発行されていたもので、地域内の重要な情報源であり、復興過程を確認するには「山古志支所だより」と同様な位置にあると考えられました。本稿では、この関連の「3点セット」のうちの「やまこし夢プラン」の内容に関して都市農村交流上の関連する部分を、多くの引用を中心として記述を進めます。

行動計画の経過シートによれば『交流』の範囲に関しては住民会議での協議は、「姉妹都市提携の推進」から始まり「油夫川流域フィールドミュージアム構想の推進」までの広い範囲を対象としたことが良くわかりました。また『産業』では「山古志の心を感じられるツーリズム」と「農家民泊・農家民宿の充実」を対象としていました。住民会議に代表される地域内での協議対象範囲と「現状と見えてきた将来像」からその内容がリアルに理解できましたが、この行動計画に記述されていた発言の内容は活動等の結果からでた実感と考えられますので、非常に現実味があります。筆者はツーリズムに関連した部分に注目して記事を読みましたが、山古志住民会議運営会議 議事録 第6号(2009年11月19日作成) [「やまこし夢ぶらん(つなごう山古志の心)・行動計画」pp40]に「グリーンツーリズムについて」の記事がありますので引用します。【現状】* 民泊で受入可能なのは学校体験学習、修学旅行などのみ。保健衛生上、その他一般客は民宿での受入となる。* 「観光」との違いがあまりない。* 他地域に比べ山古志は提供できるメニューが多い。* 1回の受入に約20軒が参加、1軒に3~4名宿泊で最大受入数は80人ほどである。* 大規模な学校からの依頼は断らざるを得ない。* 山古志地域への民泊要望は多い。【受け入れての感想】* 仕事をしながらの受入はむずかしい。* 様々

な事情を抱えている子どもたちが多く、対応に戸惑い気をつかったため、事前にもう少し相手の情報が欲しい。*震災でお世話になったことへの恩返しの気持ちでやっている。*全体での反省会ではあまり悪い意見が出ないが、個々には悩みもある。*交流を楽しんでやっている人は少ないようだ。*民宿の人は商売として割り切れるが、お金を貰うことに抵抗もある。*年間3～4回が限度だと思うが、推進していくべきなのか迷う。*受入に際し積極的な活動が見られ、地域がまとまるきっかけになっている。*苦になったり、我慢してやるようでは意味がないし、長続きしないと思う。*交流=ホストの立場ばかりではなく、出て行くことも必要な時期に来ている。*民泊について、住民会議で議論する必要があるのか。【まとめ】*意見(本音)を聞く機会を設け集約する必要がある。*交流という観点からもう少しゆっくり見守ることが大切だ。*住民会議としての方向性は出さなければならない。さらにツーリズムに関しては、同 第7号(2010年1月13日作成) [「同・行動計画」pp41]に「山古志らしいツーリズムについて・・・気がついたらツーリズムしてませんか?」と協議結果が記載されていますのでこれも引用します。「直接的経済活動(民宿、民泊など)、間接的経済活動(鯉の客を泊めるなど)、経済活動以外(生きがい、交流など)形は色々あるが、山古志らしいツーリズムとはどんなものか。*親戚も最近では気をつけて旅館に宿泊するなど、昔より家に泊める機会は減ってきた。*震災以降、地域外との個人交流は増えている。*山古志として外の人と、どうやってつながっていくかが大切である。*山古志らしさとは人の魅力や癒しであり、山古志らしいツーリズムとは交流や出会いではないか。*実はいままでもやっていたことに気づいて欲しい。」とあり、地元の声や考えが率直に語られていまして参考になりました。同じく同 第8号(2010年2月12日作成) [「同・行動計画」pp42]にも「山古志らしいツーリズムについて」の議論の結果が記載さ

れていますので引用します。「*団体旅行から個々の楽しみへと観光ニーズの変化に伴い、環境(エコ)や健康(ヘルス)などに配慮した様々なツーリズムが求められている。*『ツーリズム』とは都市住民など来る側の視点に立った概念である。*受け入れる側としては、地域が良くなるため、将来どうなりたいかによって提供できるものが決まる。*基本的には、経済活動が伴うのが『ツーリズム』であり、それは『ツーリズム産業』として解釈したい。*山古志にとって、経済活動が伴わないものも『ツーリズム』であるとする。そもそも『ツーリズム』という言葉は合わないのではないか。それに変わる言葉と概念が必要である。→それが行動計画の全ての事業の基本的な考え方になるのではないか。*山古志が提案できるのは、伝統・文化や山の暮らし、生き方そのものではないか。*前々から『本物』を見せることが重要であるという議論はしてきた。本物とは自然体でいることではないか。」「[すべての基本となる考え方]:山古志らしさ(地域として、個人として)*山古志のライフスタイル。*ありのまま、自然体。*山古志の心、山古志魂。*誇り、こだわり。*絆、ふれあい。」→(集約されて)「山古志らしさを理解し賛同してくれる人“山古志ファン”との交流が『山古志のツーリズム』とあります。そして山古志らしい(山古志だからできる)「ツーリズム」についてのまとめが、行動計画冊子pp11に記載されています、『地域全体が多くの来訪者を受け入れ、無理をして観光事業を展開し、農業外収入を上げることが目指す将来像なのではないか。』『*山古志でいう『ツーリズム』とは、『ありのままの山古志(自分)を魅せる!』ことだと考えました。『ありのままの山古志(自分)を魅せる!』ということは・・・1.自然体でいること!2.無理をしないこと!3.伝統・文化を考えること!4.自分のライフスタイル(生活様式)を守ること!ということです。そして『ありのままの山古志』に共感できる来訪者(外の人)がよりよい地域に必要な『山古志ファン』

なのではないでしょうか。さらに、私たちの暮らしに共感できる「山古志ファン」と交流を続けていくことが、山古志という『ツーリズム』だと考えました。」と結んでいます。以上から筆者が理解したものは「山古志ツーリズム：(ありのままの山古志に共感できる・山古志ファン)との交流」でした。内容的にはさらに細分化された項目等がありますが、それらをまとめたものとして、「地名+ツーリズム」に集約されていて、地域の対応をよく表現したもので筆者も充分納得しました。各会の会議では活発な議論が行われ事務局もそれによく対応して記録にまとめ、「理念・行動計画」をそれぞれの冊子にまとめ上げていったことは評価されると思います。筆者からの欲を言えば抽象的な表現ですが、「地域にある宝」に関して磨き方の言及も欲しかった部分がありました、ただこのことは今後「足し算」で加えていくことができる事項と考えられました。

なお、行動計画冊子pp27の特産品開発研究事業開始記事に「ふきのとうジェラート」、「やまこし焼」、「やまこしフラペチーノ」の開発が掲載されていたので、本稿の「味づくり」部分に引用させていただきました。有名な「錦鯉」、「牛の角突き」、最近の「アルパカ牧場」に関しては後述します。

(4) 山古志の特産品と資源

長岡市観光課発行の「2010年9月発行：長岡いろいろ」によれば、市内には10カ所の支所がありますが、それぞれの名称は、中之島、越路、三島、山古志、小国、和島、寺泊、栃尾、与板、川口です。新潟県下越在住の筆者にはなかなか覚えきれませんが、この10カ所のなかで「山古志地域」を発言していくのはかなり大変なことと想像しました。この冊子での山古志地域の概要のポイントを引用しますと、(特産の部)かぐらなんばん。(祭り・イベントの部)牛の角突き、古志の火まつり、山古志産業まつり。(遊ぶの部)アルパカ牧場、古志高原スキー場、四季の里古志あまやち会館。(自然

の部)山古志棚田・棚池、中山隧道。(その他の部)中越大震災の爪あと(木籠集落)、総合案内書「茶坊主」。(山古志のおもてなしの部)山古志弁当。と紹介されていましたが、「錦鯉」が記述されていませんでした、これは非常に残念なことです。これ以外のものについては地域独自の発信事項になると考えられましたが多少は重複してもその発信には期待しています。

以下の記述は、これまで地域で発行された案内書等からの引用で、特産品や地域の資源などを表示したものです。一般的には「特産品：特にその地方で産する品物」、「資源：生産活動のもととなる物質、地下資源。人間を含めてもいう、人的資源。」とされていますが、ここでの資源はおおむね「(その地域での)人財も含めて、諸活動に利用できる対象」をさしていると考えられます。山古志地域は南北約10km、東西約9kmほどですが、5地区14集落から構成されています、その内容は種苧原地区：種苧原集落、虫亀地区：虫亀集落、竹沢地区：竹沢、桂谷、油夫、山中、間内平、菖蒲の6集落、三ヶ(南平)地区：池谷、檜木、大久保の3集落、東竹沢地区：梶金、木籠、小松倉の3集落となっています。詳細にみていけば、集落ごとに特色のある「地域の資源」があると考えられますが、地域で発行された案内書などから、筆者が注目した特産品と地域の資源などに関して場所との関連も含めておおまかに概観します。特産品(野菜)のひとつとして、カグラナンバントウガラシ(神楽南蛮唐辛子)があります。

2009年度にかなり詳しく調査した結果を手短かに記述しますと、これはトウガラシの系統の(ベルペッパー、スイートペッパー)に属し、辛味がないシトウやピーマンのグループなのですが、辛味が遺された品種。果肉のなかの種子と白いワタの部分が特に辛い。調理例としては、神楽南蛮味噌、水菜とナンバンいため、ナスとナンバンの味噌炒めなどがあり、新作ものでは、山古志牛の陶板焼 - 神楽南蛮ソース - 、かぐらなんばんアイスクリームなどが報道されました。新作もの

が出てきたことに期待が持てます。ほかの地方でも生産されていますが、山古志の地名を頭につけて発信したい地元野菜と考えられます。もうひとつの特産品(野菜)として、体菜(タイナ、タイサイ)があります。山古志ではタイナと呼んでいましたが、稲刈り終了時期に植付けをして、11月に収穫する長梗白菜です。白茎の青物といわれていますが、漬け菜として現在も利用されています。茎が太い同種の長岡菜との区別がむずかしいのですが、どちらも塩漬けにしてから、(加熱して)煮菜として調理されます。菌ごたえがあるかもしれませんが漬物で食することも考えられました。こちらほかの地方で生産されていますので、地名をつけることが考えられます。ヤーコンも特産品(野菜)と考えられますが調査が不十分なので記述は控えます。以上の特産品(野菜)は地域内に広がって栽培されていますが、栽培にあたり、おおむね前年に種をとり、その種から育てているので、厳密には集落ごとに若干相違しているそうです。筆者はその相違点を探してみたものの、根気等が続かなくなり途中で中止しました。生産者が自らその特徴や味等の特別なものをポイントとして公表することもおもしろいのではないのでしょうか。種から栽培する方法は、困難が伴うと考えられますが野菜栽培の専門家であることを示していると思います。またその秘伝や栽培技術の一端は都市住民にとって非常に興味あることと考えられました。秘伝や栽培技術の場合その全部を公表できないと思いますのでその一部だけでも栽培物語として聞くことが出来たならば、その人は山古志ファンになると思います。

「山古志のみどころ」として、各種の広報で紹介されている、「牛の角突き」、「錦鯉」、「棚田の風景」、「手掘りトンネル中山隧道」、「古志高原スキー場」、「アルパカ牧場」は観光交流の資源でも考えられます。「牛の角突き」は2009年秋に改修工事が終了した、池谷の山古志闘牛場で開催されます。この闘牛場の入口につづく坂道上のアプローチは、改修工事でコンクリート

製の階段も設置されましたが、その階段の壁面には写真家片桐恒平さん撮影の写真が、屋外展示用に加工されて設置・展示されています。貴重なシーンがありますので必見の価値があります。「錦鯉」は地域の全域で養鯉されています。「棚田の風景」もおおむね地域の全域で楽しむことができますが、特に写真撮影で人気のある地点が山古志ビューポイントとして広報されています。虫亀の西方の金倉山展望台、同虫亀の北方の萱峠展望台への途中、桂谷の県道23号の沿道、竹沢の古志高原スキー場の南方の小千谷市塩谷集落への途中にあります。小松倉には「手掘りトンネル中山隧道」、前述の竹沢には古志高原スキー場があります。また観光スポットとして虫亀の「三味線石」などの6ヶ所が紹介・広報されています。以上は多少分野が相違しているものの、産業・地域文化・伝統行事などの分野で地域の資源と考えられます。さて以上のほかに地域にはイベント行事がありますがこれらは観光交流上の資源でもあると考えられます。おおまかに月毎のものを計上して年間のイベント行事予定を概観します。年明けの1月中旬「さいの神」(毎年小正月に行われ、カヤを燃やし、五穀豊穡や家内安全を祈願します。各集落でそれぞれ開催します。)、2月「古志高原スキー場スキーカーニバル」、3月「古志の火まつり(種苧原)」(イベント最大の見所は日本一の巨大なさいの神です、花火も打ち上げられ、さいの神に点火されると、まつりの興奮は最高潮に達します)、4月「若鯉品評会」、5月「田植え」、5月～11月「牛の角突き」、8月「盆踊り」、9月「山古志ウオーク」、10月「錦鯉田上がり品評会」、11月「錦鯉品評会開催」、「産業まつり(種苧原)」、「四季の山古志写真コンテスト」、12月下旬「古志高原スキー場開き」。(10月の震災復興祈念関係の行事は除きました)以上のほかにもあるとは思いますが実に豊富な資源があると思います。この個々の資源と資源の組み合わせを広報したり、ツアーに組込むことが、滞在型の観光交流の広がりを生み出すと考えられました。

これに関しての広報活動のことですが、この10月に長岡市大手通2丁目の「ながおか市民センター」1階のまちの駅を訪問しましたが、他地域のPRチラシが多数あるなかで、「ここは遊心の理想郷 山古志」が一種類でした、A4判三つ折りサイズですので少々さびしい印象でしたがもう2・3種類ほど追加すれば、「PRしています」の効果がさらに出てくるものと考えられました、チラシも有効な広報だと思います。

4. (仮称) やまこし復興交流館構想

2010年3月の地元新聞：新潟日報の記事によれば、「3月中旬に「災害メモリアル拠点整備」の実施計画がまとまり、4施設3公園を整備し、その内容としては仮称ですが、(1)長岡アーカイブスセンター、(2)やまこし復興交流館、(3)小千谷震災ミュージアム、(4)川口「絆館」、(5)長岡市妙見のメモリアルパーク、(6)長岡市山古志地域のメモリアルパーク、(7)川口町の(震災)メモリアルパーク」とありました。「この構想・実施計画は、(社)中越防災安全推進機構、新潟県、長岡市、小千谷市、川口町などで構成された災害メモリアル拠点整備委員会によるもの」とありました。さらに3月下旬の記事によれば、「長岡市・小千谷市・川口町の3首長が、新潟県知事に中越大震災復興基金からの支援を求め、2011年秋の完成予定としている。」との報道がありました。復興基金には整備費及び運営費を合せたものの支援をもめているとの内容でした。筆者は以上の記事から、災害メモリアル拠点整備も大詰めに入ってきた印象を受けました。

その後、8月の夏期研究合宿中に(社)中越防災安全推進機構の研修室において、「中越大震災メモリアル拠点整備基本構想」の概要に関して同機構からレクチャーを受ける機会がありましたが、その時のヒアリング内容と配布資料をもとに、『(仮称) やまこし復興交流館』の基本構想上の概要について記述します。この「拠点

整備基本構想」は、展開している拠点を「中越メモリアル回廊」として、構図的には時計まわりに、「知る」→「見る」→「見直す」→「見る」→「深める」→「体験する」→「見る」→「知る」というコンセプトを円環状にネットワークしたものとしています。「見る」部分がパーク等に該当していますが、「回廊」では「様々な体験が活きる各拠点で私たちが出会うもの、それは人の『絆』で紡がれる数々の物語です。震災記録の伝承も、交流の未来も、この回廊から始まります。」とされています。そして整備の考え方としては①被災地分散型、②4拠点・3パークのエリア全体、③既存活用とソフト重視で地域と共に運用、④来訪者・交流人口の拡大をめざして、「つながりとりピートを促す自立自活する施設群」を整備するとしています。

上記のコンセプトの円環は、4拠点施設と3パーク等であり、名前的には、それぞれ「長岡アーカイブスセンター(仮称)」、「木籠集落水没家屋周辺整備」、「やまこし復興交流館(仮称)」、「震災パーク」、「川口『絆』館(仮称)」、「小千谷震災ミュージアム(仮称)」、「妙見メモリアルパーク」となっています。「震災地となった山の暮しを見直す・やまこし復興交流館(仮称)は、全村避難の人々が震災後に村に戻った理由を探る：被災地の文化・復興伝承拠点、『伝統文化と生業を知ってほしい!・山の暮し体験』、『自身の記憶と原風景・フィールドワーク体験』、『雪の力の再利用・雪室の利用』、山古志の伝統的な暮らしの場である古民家の活用を予定」を、この復興交流館は基本構想としています。9月に行われた、夏期研究合宿の報告会では「8月のレクチャー」のヒアリング等についての報告も行われましたので、以下にその内容等を記述します。「やまこし復興交流館(仮称)」の建物は、元養蚕農家の建物を移築・復元する、建築面積が約290㎡なので、駐車場などを含めた敷地面積は約1,500㎡程度になる予定。地域の住民を交えた検討委員会を開催して、建築計画等の検討を継続して行っている等のことが報告されました。

さらにその後、2010年10月30日、地域サポート人ネットワークシンポジウム東日本大会・中越大震災6周年復興祈念シンポジウムが、主催：新潟工科大学、場所：長岡商工会議所にて開催されましたが、その時の資料集に、「メモリアル拠点整備委員会（事務局：(社)中越防災安全推進機構）発行のリーフレットがありましたので、これをもとに追加の情報を記述します。「想いを紡ぎ、揺るぎないチカラに」とうたってあり、「～整備事業が始まりました」とあります。基本構想本文にも「私たちの10月23日を伝えていくために、中越大震災メモリアル拠点整備を進めています」とあります。名称としてはそれぞれ「長岡アーカイブスセンター（仮称）」、「やまこし復興交流館（仮称）」、「木籠メモリアルパーク（仮称）」、「川口『絆館』（仮称）」、「震央メモリアルパーク（仮称）」、「小千谷震災ミュージアム（仮称）」、「妙見メモリアルパーク（仮称）」となっていました。全体を見渡して気づきましたが、「やまこし復興交流館」のオープン予定は記載なしで、それ以外のオープン予定は平成23年10月（2011年10月）となっていることが若干の懸念事項です。施設・建物の内容は大きな変化はないものと想像していますが、時間経過がありますので、本文の内容を引用しておきます。「山の暮らしを再生する・ふるさとがもつ、チカラとは」。予定地：遊休地を活用・再建。機能：自然や伝統文化の伝承と交流。破壊されたふるさとに戻った山古志の人々。そこには守るべき里山や伝統文化がありました。山の暮らしの体験から新しい交流の始まりへ。

- (・) 地震に耐えた古民家を拠点に：山の暮らしを今に伝え地震に耐え抜いたシンボルとして古民家を交流の場として再建活用することが検討されています。
- (・) ふるさとに生きる知恵を生かして：住民の皆さんとの協働作業を通して、展示内容・活動内容を決定。山古志ならではの施設運営を検討しています。

以上のように記述されています、検討委員会も継続

して進められている模様ですので、その協議結果を期待していますが、協働作業が充実したものとなり、住民に大切にされる施設・建物となり、交流に関して新しい方向を実現することを願っているものです。この古民家は、竹沢二丁野に所在した「星野家住宅主屋」であることが「8月のレクチャー」で感じられましたが、現在は解体された各部材が、旧長岡農業高校種苧原分校の建屋内に保存・保管されています。その建物の移築・復元ということで、解体当時の状況の映像を視聴することができました。その映像内容については記憶があいまいとなってしまう概要の記述は出来ませんが、幸い以下の論文の写しが手元にありますので、引用して若干言及します。① [平山育男 (2006) 『長岡市山古志竹沢星野家住宅について』「長岡造形大学研究紀要第4号」、② [浅井賢治 (2008) 『農家型の確定と建築規制後の建築形態に関する研究』「東洋大学福祉社会開発研究創刊号」] の論文において、本文と平面図等の図面類及び写真からかなり詳細にその建物概要が判明します。「①の論文」からは伝承では明治17年頃の建築、とされる養蚕農家の住宅ということがわかりました。明治時代の山古志では、養蚕が盛んであったそうですがそれを具体的に示す貴重なものと記述されています。木造二階建、一部中二階入母屋造平入トタン葺の形式とありました。平山教授による関連の論文には「新潟県中越地方においてみられる特徴的な番付けについて」及び「長岡市山古志旧星野家住宅の柱間寸法について」注2)があり、それぞれ『土台、柱、梁などに振られた間数組合番付の調査・考察結果』及び『部材調査による柱間寸法値の報告と設計寸法値と設計方法の検証』が報告されていました。内容は非常にむずかしく筆者はコメントできませんが、「やまこし復興交流館」が完成した時などの解説文を理解する為です。「②の論文」では旧山古志村の伝統的な民家でもあり、地震時には壁面の一部が崩落しただけの（強靱だった）建物についての民家型及び格式空間を論じていますが、民家型

では「魚沼型の民家」だったこと、格式空間に関してはその実態を形態と構成から論じたものでした。中越地方の民家型に関しては〔深澤大輔（2009）「激甚災害と農山漁村・農村住宅」注3〕に農家住宅間取り型として、四つの類型が紹介されていますが、すなわち「魚沼型A」、「魚沼型B」、「魚沼型C」及び「魚沼型D」です。

5. 民俗学者 宮本常一の提案

(1) 旅の巨人

既刊図書での略歴及び年譜から引用しますと、「宮本常一（みやもとつねいち）1907年、山口県周防大島の農家に生まれる。大阪府立天王寺師範学校卒。1939年に上京、渋沢敬三の主宰するアチック・ミュージアムに入る。戦前・戦後の日本の農山漁村を訪ね歩き、民衆の歴史や文化を膨大な記録、著書にまとめるだけでなく、地域の未来を拓くため住民たちと膝を交えて語りあい、その振興策を説いた。1965年、武蔵野美術大学教授に就任。1966年、後進の育成のため近畿日本ツーリスト株式会社・日本観光文化研究所を創立し、翌年より『あるくみるきく』を発刊。1981年、東京都府中市にて死去。著書『忘れられた日本人』『日本の離島』『宮本常一著作集』（未来社）など多数。』〔須藤 巧編（2010）宮本常一と歩いた昭和の日本 第11巻 関東甲信越① pp222〕と紹介されています。その旅の全貌等は、〔毎日新聞社編（2005）「宮本常一写真・日記集成 - 上巻・下巻・別巻 - 』毎日新聞社〕に詳しく紹介されています。生涯にわたり日本各地をフィールドワークし、特に離島への旅・調査が多く、多数の撮影した写真、膨大な日記、著作を残しました。その旅の模様を引用しますと「宮本常一は、今日の民俗学の水準からは想像もできないような巨大な足跡を、日本列島のすみずみまで印した民俗学者だった。その徹底した民俗調査の旅は、1日あたり四十キロ、のべ日数にして四千日に及んだ。宮本は七十三年の生涯に合計十六万キロ、地球を丁度

四周する気の遠くなるような行程を、ズック靴をはき、よごれたリュックサックの負い革にコウモリ傘をつり下げて、ただひたすら自分の足だけで歩きつづけた。泊めてもらった民家は千軒を超えた。宮本と親交の深かった作家の高田宏は、宮本のことを空前絶後の旅行者だといい、宮本を超える旅行者はもう絶対に現れないだろうといった。一定程度の交通網が整備された時代に生まれた宮本は、自分の足だけで旅をしなければならなかった江戸時代の旅人とも、また、海外にもひとつ飛びで行ける現代の旅人とも違って、日本列島をいわば等身大の大きさで、くまなく歩くことのできた旅人だった。』〔佐野眞一（1996）「旅する巨人」（文芸春秋）〕とあります。筆者はそのなかでも特に1970年の『佐渡の国鬼太鼓座』結成への関与、旧山古志村での調査・講演の旅に注目しました。宮本常一が同村を訪問した記録等は以下のとおりです。①1970年（昭和45年）9月14日・15日。②1971年（昭和46年）1月14日・15日。③1976年（昭和51年）7月。④1978年（昭和53年）8月。このうち1970年（昭和45年）9月の訪問は、当時の佐藤久村長からの「明るい活気に満ちた山古志村にしたい」という相談を受けて講演することになり、その演題は「農村の将来はどうなるか」だったそうです。1971年（昭和46年）1月の訪問に関しては「手をあげて村の概況を話す佐藤村長と、会話を聞く宮本常一（左端）」という解説付きの写真があります。1976年7月では只見線からの通過だけだったかもしれませんが。1978年8月には二泊三日の行程で、村内7か所で講演を行ったとあります。このように1970年代において、旧山古志村に深く関与した民俗学者だったと考えられました。

(2) 宮本常一の提案から

〔山古志村写真集制作委員会編著（2007）「ふるさと山古志に生きる - 村の財産を生かす宮本常一の提案 - 』農山漁村文化協会〕によれば宮本常一は、1970年代に当時の山古志村を数度訪問して、村内で「活気ある村

づくり」に関する講演を行ったことが紹介されています。その内容は、近畿日本ツーリスト日本観光文化研究所編「やまこし活気ある村をつくる」山古志村(1977)として発行され、またその概要は1979年に十回にわたって村の広報に掲載されたそうです。この「ふるさと山古志に生きる - 宮本常一の提案 - 」の第五章に述べられている各講話の題名を引用しますと「第一話：人口減少をくい止める核づくり、第二話：農協合併は村の意識を高める、第三話：本当の畜産は山の資源を利用することから始まる、第四話：安易な工場誘致をしてはいけない、第五話：錦鯉の大衆化で山古志の名を高めよう、第六話：模型づくりや文化財保存を通して山古志を知る、第七話：自分たちの山を生かして使おう、第八話：誇りをもって農業をしよう、第九話：観光と農業を組み合わせた村づくり（*山古志の土地を生かせ、*果樹園の経営は決してむずかしくない、*いつ行っても楽しめる果樹園、*有利な資金を借りる、*観光農園は質の良い客を誘致できる、*来訪者の受入体制をつくれ、*山古志に必要な核[目的をもった仲間が集まり、お互いに研究しながら新しい方向を見い出していく]づくり)、第十話：観光の基礎・風景と味を作り出す（*観光を開発の軸に、*風景づくり、*味づくり）」となっています。本稿の都市農村交流上では特に、第九話と第十話の講話が関係してきますが、第九話の『*観光農園は質の良い客を誘致できる』のなかで、「山古志の観光開発で一番大切なことは、村にとってプラスになる来訪者を徐々によいのですが、受け入れていく体勢を作ることだというのは、村に何日か滞在し、お金を落としていってくれるばかりでなく、村の良さを見つけ出してくれる人々です。」と述べています。農家民宿などの企画・実践等は部分的に行われてきたわけですが、現在でもこの方向を指向したものが、協議・検討の対象になると思われます。第十話の『*風景づくり』のなかで「風景づくりは、まずは、花づくりなんです。(例としてススキ、ハギ、アジサイが

あげられています) また500株とか1,000株とか群生させれば見応えがでてきて、風景作りになる。」と述べています。ブナは旧村の木ですが、山古志闘牛場周りをはじめとして各地に見事なブナ林が展開しています、ブナ街道としても植栽が進められています。ハギは旧村の花であり国道沿いの斜面に多数あります、今以上に手をいれてハギの植栽帯をつくることも協議の対象になるのではないかと思います。宮本常一の提案には花づくりから始まる風景づくりがあったわけですが、現在山古志地域で行われている「サルビアを植える活動」などはこの提案ともつながりがあり、味づくりについても「やまこし汁」、「山古志弁当」などの企画は、つながりがあったと考えられました。宮本常一は、地域づくりについても提案していますが、それは1979年6月に山形県舟形町で行われた「舟形町における複合経営のあり方」という題目の講演です。[田村善次郎編(2006)『宮本常一著作集(47):新農村への提言Ⅱ』(未来社)]に収録されていますが、その講演録のなかには「山古志村の複合経営」の章もあります。この「地域づくりの提案」の要点は「その地域を良くすることは、その地域とそこの住民の可能性を引き出していくことになると考えるので、その為に活動の足腰を丈夫にする点から、流通システムまで含めた農業に関する調査と基盤整備を時間をかけて進めながら、都市民と交流できる観光などにより、その関心・評価を、市場からの評価と併せて、地域の住民の『はりあい・意欲』に結び付けて、その可能性を引き出していくこと。はりあい・意欲を高めるため仲間との討議は続け、都市民からの投資を引き出す工夫も大切」としています。この提案は現在でも十分通用し、場合によっては改良点を加えて利用する方法もあると考えられました。農業生産系だけではなく、加えて観光交流などで農山村の資源も利用するという方法です。自生もしくは自然栽培に近いもので花・葉・実が楽しめるものなどの検討も考えられました。

6. おわりに

(1) 味づくり, 花づくり, 風景づくりなど

副業系に属するとおもいますが、「味づくり」は伝統郷土料理に加えて「山古志汁」、「山古志弁当」と新しい試みが進んでいます、また特産品開発研究事業では「ふきのとうジェラート」、「やまこし焼」、「やまこしフラペチーノ」の開発が取り組まれていて、かなり進捗している模様です。「花づくり」に関してはコスモス、サルビアなどの花づくり・花植え活動が進んでいます、ブナの植栽活動も進んでいますのでこれらに加えて、ハギの手入れ・維持管理なども今後のテーマになると思われれます。来訪者と共に手入れをする方法、ハギの場合秋に枝を刈ってしまう方法、刈りとった枝の始末、次の年の発芽のイメージなどを協議することも面白いと思います。「花づくり」、「花木・樹木植栽」、などは「風景づくり」の構成要素をつくっていくこととなります。山菜園づくりも同様ですが、花づくりの花壇、ハギ・ブナ林等の手入れ、山菜ヤマウド園、ヤーコン畑、カグラナンバン・体菜などの野菜畑、復旧再生水田、その他の自生植物群生地をつないだ『(仮称)植物・作物の屋外博物館』のアイデアも見込みがありそうです、手入れ・維持管理の作業は、体験・体感につながると考えられます。手入れ等の過程で植付け場所の選定や手入れ時期の選択、手入れ時間などの協議も行えば、来訪者・参加者の動機も盛り上がるのではないかと想像しています。2009年来、油夫の「アルパカ牧場」が動物とのふれあい、毛刈りしたものの加工などで有名となり、軌道に乗ってきている模様です。猛暑の影響による悲しい出来事を乗り越え、牧場隣接の集落集会所・農産物直売所も供用・稼働してその運営も順調に進み、道路向かいの交流・宿泊建物も完成の運びとなり、11月以降は頭数も増え冬期には種苧原の元牛舎で越冬、同集落での牧場の建設計画があるそうなので、今後の活動・展開には期待がもてます。やはり山古志観光の目玉になると考えられます、「牛の飼育」の伝統とその

技術があったので、アルパカの飼育も可能になったものと想像しています。

また東竹沢地区では「交流牛舎」が完成して、牛とのふれあいが交流に一役かっています。筆者は雑草をエサにする山羊の飼育にも展望があると考えましたが、残念ながら実行はされていない模様です、三条市下田地区の今井牧場では、山羊の貸出を行っていて、刈谷田川堤防で雑草除去の実証実験が行われたそうです。そのほか新潟県内では、「日本原産馬」、「モンゴル山羊(カシミヤ山羊)」などの動物を介して交流を進める動きがありますので、「アルパカ」はそういう活動の一翼も担うことになると考えられました。

(2) 日常生活空間の体感

「山古志ウオーク」の概要を報告しましたが、山古志地域内の国道・県道・主な市道(旧村道)を徒歩で通行すると、おおむね半日位の行程です。車で走行すればさらに短時間で通過することになりますが、道路上から注目すれば、斜面上に展開している集落の風景は、そこで行われている日常の生活を彷彿とさせます。夕方の照明が灯りだす時間帯、また夜間の各戸の明かり、冬の朝日が当たっている時など、斜面に点在する各住宅の佇まいは平場生活しか知らない筆者には新鮮な風景でした。そういう体験からも旧村道に入り集落内を歩くことでその集落の「日常生活空間」を体感することになります。実際に体感する時は不審者にならない為に、農家民宿に宿泊した時とか、案内者をお願いするとか、予め区長さんに連絡しておくとかの方法で行うこととなりますが、この集落内の日常生活空間の体感によって、住宅の敷地利用の知恵、例えば融雪の為に池の有無、家庭菜園の作目、花壇の花、樹木の種類、生簀とその上屋等、さらにコレクティブタウン(助け合いの集落)の実際、花づくりの実際などを、体感できると思います。微妙な表現になりますが、想像力を動員しての、積雪時の道付け、雪処理の工夫、一晩に

1 mを越える降雪時のイメージ、雪掘りのイメージ、雪国の集落内活動、公道での除雪車両の活動など、想像力が追い付かないかもしれません。追い付かない場合は冬場の訪問によって、レポートが必要になるかもしれません。このように集落内の日常生活空間の体感からそこでの生活上の知恵を吸収することも、都市農村交流のツアー要素になると考えられます。

(3) 都市農村交流と地域づくり

筆者は、都市農村交流の実践と諸活動を、(生活の質の向上の実現を目的としている)「地域づくり」概念のひとつの分野と理解していますが、上記の実践と諸活動はここまでみてきた事例のように、着実に進んでいると考えられました。「地域づくり」という広い概念において、《地域の資源をもちいた運営を重視した》地域マネジメント(地域運営)という概念もありますが、この実践と諸活動はこちらに強く影響してくると思います。その影響は間接的なものであると考えられますが、この交流の実行過程と終了後に現れると思われる。直接的な影響はボランティア活動などによる地域内行事の支援などです。「ヤマウド山菜園」等はまだ「点」的ものですが、直接的なものであり農地の手入れにもつながる交流と考えられます。個人的なアイデアですが、「集落版：健康生きがい農園(山古志魂)」、「復旧完了水田」、「第3山菜園」、「ヤーコン畑」、「仮称：栽培きのこ園」、などをそれぞれに「だんご三兄弟」のようにつないで複合帯を設定して、「交流を通した手入れ」などを計画する方法も地域マネジメント上、有効になると考えられました。

【謝 辞】

2010年度の本稿をまとめる為、取材・聞き取りなどで多くの方にご協力をいただきました、またお世話になりました。

個々のお名前はあげておりませんが、記してお礼を申しあげると共に感謝を申しあげます。

【注 及び参考文献等】

- 注1) エコツーリズム推進法(2007)第2条「エコツーリズム：観光旅行者が、自然観光資源について知識を有する者から案内又は助言を受け、当該自然観光資源の保護に配慮しつつ当該自然観光資源と触れ合い、これに関する知識及び理解を深めるための活動」同条で「自然観光資源：(一) 動植物の生息地又は生育地その他の自然環境に係る観光資源。(二) 自然環境と密接な関連を有する風俗慣習その他の伝統的な生活文化に係る観光資源」
- 注2) (2010年2月)日本建築学会技術報告集第16巻第32号、(pp373-376)及び(pp377-380)
- 注3) (財)住宅総合研究財団(2009)「現代住宅研究の変遷と展望」、丸善、(pp228-235)
- * 内田雄造編著(2006)「まちづくりとコミュニティワーク」、(社)部落解放・人権研究所
- * 須藤 功編(2010)「宮本常一と歩いた昭和の日本 第11巻 関東甲信越①」農山漁村文化協会
- * 山古志村写真集制作委員会編著(2007)「ふるさと山古志に生きる-村の財産を生かす宮本常一の提案-」農山漁村文化協会
- * 須藤功著(2005)「写真集 山古志村-宮本常一と見た昭和46(1971)年の暮し-」農山漁村文化協会
- * 佐野真一(1996)「旅する巨人」文芸春秋
- * 佐野真一著(2001)「宮本常一が見た日本」日本放送出版協会
- * 青木辰司著(2010)「転換するグリーン・ツーリズム-広域連携と自立をめざして-」学芸出版社
- * 青木辰司、小山善彦、バーナード・レイン著(2006)「持続可能なグリーン・ツーリズム-英国に学ぶ実践的農村再生」丸善
- * 青木辰司著(2004)「グリーン・ツーリズム実践の社会学」丸善
- * 松村和則・青木辰司編(1991)「有機農業運動の地域的展開-山形県高島町の実践から-」家の光協会
- * 山田耕生：日本の農山村における農村観光の変遷に関する考察「グリーン・ツーリズム」登場以前の1992年まで、共栄大学研究論集第6号、pp13-25、2008/3
- * 佐藤誠、篠原徹、山崎光博編著(2005)「グリーンライフ入門-都市農村交流の理論と実際-」農山漁村文化協会
- * 農林水産省編(2010)「食料・農業・農村白書 平成22年版」及び「同・参考統計表」、佐伯印刷㈱
- * 中島紀一・金子美登・西村和雄(2010)「有機農業の技術と考え方」コモンズ
- * 日本建築学会編(2004)まちづくり教科書1まちづくりの方法：丸善
- * 西村幸夫編(2007)「まちづくり学」朝倉書店
- * 戸所 隆著(2010年4月3日)「日常空間を活かした観光まち